

—忘れまい

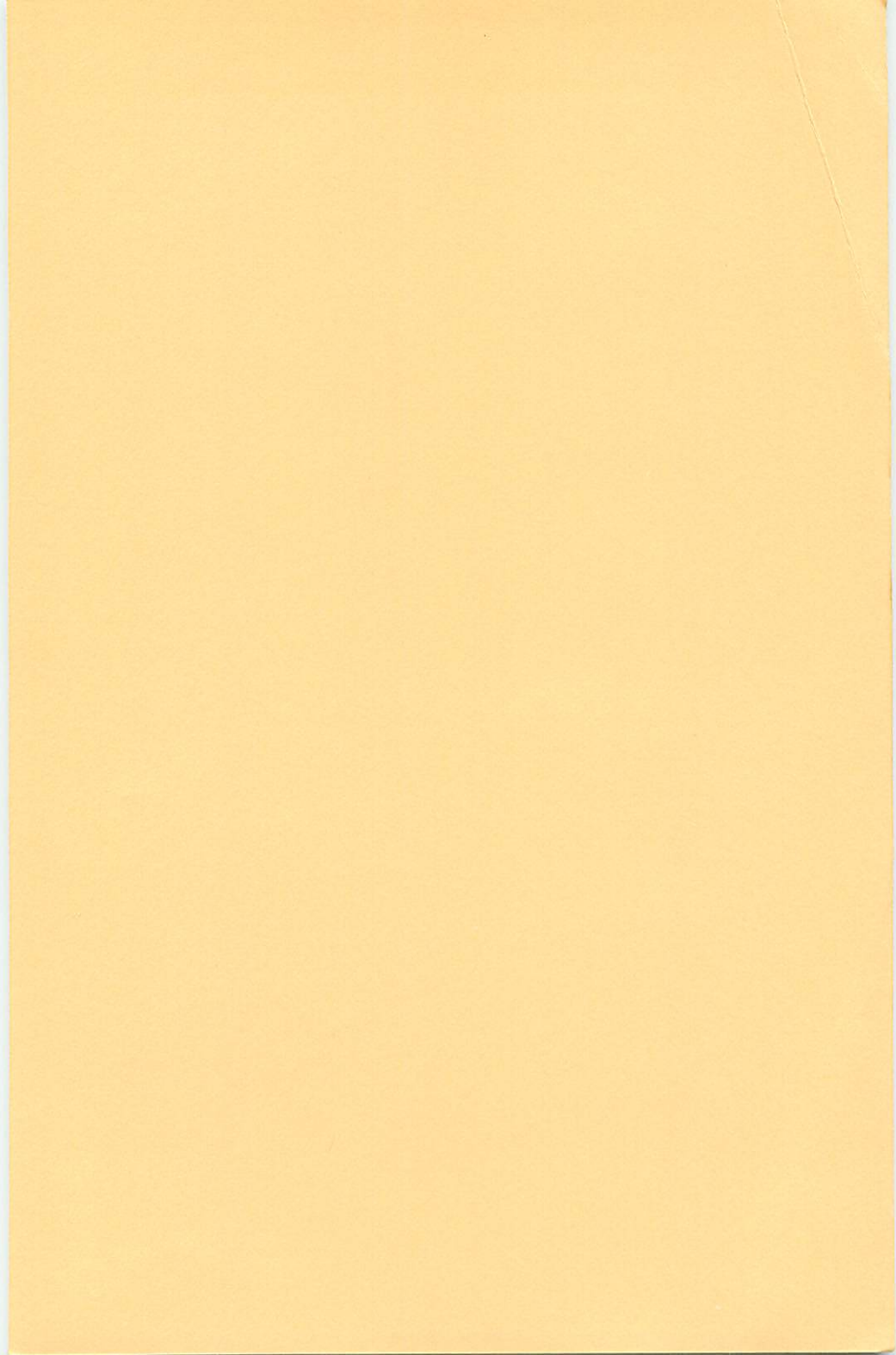
あの日のこと・あの人のこと—

私の戦争体験記

(第2集)

ふじさわ・九条の会





第2集発刊にあたって

二〇〇六年十一月に続き、「私の戦争体験記」第2集を発行することが出来ました。執筆、投稿頂いた方々に感謝致します。今回の作品の中には、自らの体験ばかりでなく、父や母、兄弟や祖父などから聞いた話を綴って頂いた方もありました。私どもは、こうした小冊子の発刊を通じて、再び戦争を引き起こさない為に、多くの皆さま方の悲惨な戦争体験、戦争で亡くなった方々の思い出、戦争時代の苦しい出来事などを、次の世代に語り伝えて行く事が何よりも大切な事だと考えます。

先の参議院選挙で、三年後の改憲を目指した自民党が大敗しました。今回の選挙結果には「憲法九条改悪ノ」の多くの国民の意思が示されたものと思います。しかし、これで憲法改正の動きが終息したわけではありません。日本を再び戦争をする国に戻させない為には、引き続き、多くの市民、様々な戦争体験をされた方々と手を携え、地道に平和を守る運動を進めて行かなければならないと思います。

当会としては、こうした運動の前進めざし、今後とも「戦争体験記」の発刊を続けて参りたいと考えますので、皆さま方のご協力をお願い致します。

二〇〇七年 八月

「ふじさわ・九条の会」

目次

特攻機で散った	
次兄の思い出	森本 玲子 1
嬉しかった平和憲法	安江香代子 3
戦争に重なる顔	桑原 玲子 5
ヒロシマ六十年前の体験	佐藤 良生 8
京急黄金町駅は	
運命の現場	荒木昭太郎 12
私の憲法	金田富佐江 15
祖父の戦争体験	
―聞き書き―	渡邊 愛 18

―さいたま市・梅原麦子さん・「憲法9条」つづり絵手紙―



サイパン島からきた

松本ヒロちゃんのこと 熊崎 勝弘

22

乃木高等女学校から

横河電機に学徒動員 匿名

25

戦争中に何を食べたか

庄司 光子

27

幻のコロネット作戦と軍国少女

芝 実生子

30

満州で現地召集された父とおじのこと

小林麻須男

33

戦争より生きて帰って

矢口 仁也

35

戦いやんで

佐川 光郎

39

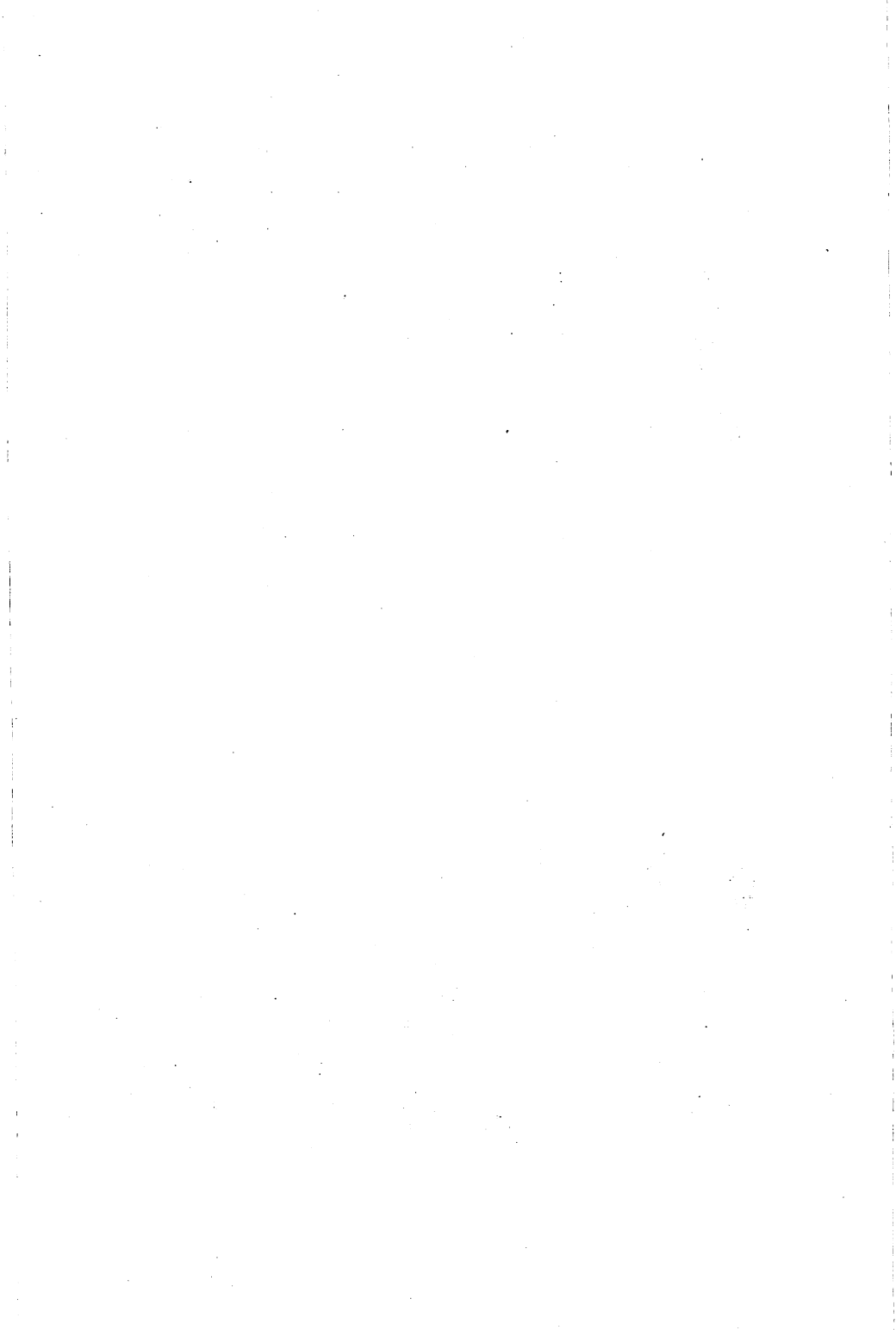
九条を守ることは、終戦を守ること

藤臚 泡

41

—表紙絵手紙 山崎正子—





特攻機で散った

次兄の思い出

森本 玲子

(鶴沼在住)

私の次兄は、十九才で、サイパン島沖で特攻機もろとも散った。小学四年〜六年生の頃、男子生徒の前に、朝礼台で「ベンセイシユクシユク」と袴に鉢巻き姿で詠ったあの次兄が特攻隊で死んでしまった。今なら自殺である。戦争中は、国の命令で死地に赴く兵士は水杯で祝い送られた。敵艦に飛び込む時、最後に言うのは、「天皇陛下バシヤイ」ではなく、「お母さん」だったそうだ。母を脳溢血で亡くしていた次兄は、何と言って突

っこんで逝ったのだろう。白い布に包まれて還って来た木箱の中に入っていたのは、セピア色の次兄の、笑顔一杯の写真だった。特攻に参加すれば、三階級特進することが約束されることを誰かに聞かされた。あの時代、前途ある若者が、次々と国の為に生命を捧げた。

後で解ったことで、とても残念に思ったことは、特攻機で出撃する前夜、次兄に逢った時の事である。陸軍技士であった叔父の所へ次兄に代わり養女にはいった私、養子に入る筈だった次兄が急に実家に帰って来た。その時、養父である叔父から、学校を休んでも次兄に逢いに行きなさいと言われ、鶴見の実家に、一日帰ったことがあった。あの時、次兄がどうしてこんなにお菓子を土産に思う程、チョコレート、キャラメルなど、なかなか手に入らないお菓子を沢山持って来てくれた。もう、その時は、実母は他界していて、継母が、父の田

舎から嫁いでいらしていたが、驚く程のご馳走を用意して待っていて下さったのに、次兄は、

何一つ口に入らず、何一つ言葉を出さなかった。

多分、これが最後の別れになることが、隊から

言い渡されていたのではないか。今でも、あの

時の次兄の無口が気になってならない。

次兄はとても面白い兄で、子供の頃、毎月一回、捨て売りと言って、机や本箱の付けをして、鉛筆

の短くなったもの、消しゴムの小さくなったもの、

ノートの二〜三枚残った用紙などを私たち弟妹に

店を出してくれた。また、「ベンセイシユクシユ

ク」を学校で詠う前の晩など、私と弟に物差しを

腰に差して踊れと命令、私は日の丸の扇をパツと

開く事が、何度やっても上手く出来なかったこと

を思い出す。

そんな、次兄を思い出すにつけて、今の若者達に、若者よ、生命をしつかり掴まえよう、と訴えたい。

苦しい思いで、この世に送り出してくれた生命、

子のない親はあつても、親のない子はない。食

料難時代、煮魚の汁だけ啜って身は育ち盛りの

子供に廻し、何一つ愚痴は言わなかった母、再

びこんな時代を到来させてはならない。そんな

時代は繰り返すまい。人が人を殺す、一人殺せ

ば殺人者、一〇〇人殺しても罪にならない戦争。

そんな時代を繰り返させないために、九条は輝

き、また輝き通させねばならない、と強く思う。

最後に、私が終戦後読んだ本の中で、忘れられない一文を書き留めておきたい。

「人間にとつて大切なもの、それは生命だ。それは一度しか与えられない。だから、あてもなく過ぎ去った歳月に、痛ましい思いで、胸を痛めるこ

との無いように。いやしくも、くだらなかつた過

去に身を焼くことの無いように生きなければなら

ない。」(パーベル、コルチャーギン)

嬉しかった平和憲法

安江 香代子

(片瀬在住)

最近、東京丸ビルが新しく建てられたニュースを知り、昔のことを思い出しました。

昭和十八年、国民が全員勤労するということで、家庭に居た私も初めて丸ビル近くの工業倶楽部ビルの中の会社に、勤めに出ました。当時は、人手不足で、その会社では人一人紹介すると、一日、賜暇が貰えるとか、今では、全く考えられないことである。

戦局もだんだん厳しくなつて「ぜいたくは敵だ」「ほしがりません勝つまでは」、の時代でした。

衣類は勿論、糸まで切符制でしか買えなかったので、モンペのようなズボンに布製のカバンを肩にかけ、満員電車で毎日、丸の内まで通いました。

会社では、毎日のように壮行会が行われ、男性は、年配者か、身体の弱い人ばかりになりました。

食料不足で外食は行列で順番待ち、それも得体の知れない黒い色をした麺類か、中身の薄い雑炊でした。喫茶店はいつも昆布茶ばかり、三時になると行列が出来て、少しはましな物が出たようです。丸ビルの中のお店は閉まっているところが多く、商品もなくて、せっかく貰ったお給料も使い途がありませんでした。冬は暖房が不足で、どのビルも日向ぼっこをする人で、壁の廻りはいっぱいでした。

若い友達は戦地に、又は結核で他界、華の青春時代は思い出してもつまらない悲しい事ばかりだし

た。

終戦の前年、会社は地方に疎開、私は病を得て休職しました。翌二十年三月、東京大空襲で本郷で親戚が焼け出され、ひどい姿で私の家まで逃れて来ました。絶対、疎開はしない、この家で死ぬと頑張っていた祖父母も、その姿を見て心を動かし、現在の片瀬にあった叔父の家の隣に移り住み、私は、祖父母の世話で一緒に暮らすようになりました。ここは、空襲こそありませんでしたが、近くに機銃掃射されたり全く安全とは言えませんでした。

五月二十六日、原宿にあった私に家は丸焼け、母は一人で逃げまどい、両側の家が燃えている中を、布団を防火用水に浸け、頭から被って逃げ、神宮外苑の絵画館の池のところで一晩明かしました。隣のお宅では、おばあさんが一人焼死、泣く泣く逃げた娘さんと赤ん坊が泣いている姿に母も一緒

に泣いたそうです。そして、晩年、入院中、母は当時の夢を何度も見たらしく、大声を上げて廻りの方達に迷惑をかけました。

思い出すのも辛い当時のことですが、この頃の世の中が昔と同じようになるのではないかと不安でいっぱいです。

私の八十余年の中で、一番嬉しかったことは、新しい憲法が出来て、戦争を二度としない国になったということです。



平和で暮せろ
女界在

— 齋藤 恭子 —

戦争に重なる顔

―反戦ビラをまき、投獄

いつも特高に監察されていた父―

桑原 玲子

(辻堂西海岸在住)

―小学生になったら戦争が始まった―

私は小学生に入る前の年に小田急鶴沼海岸駅前に越して来ました。その頃の鶴沼海岸駅は、電車が着いても二、三人の乗客が乗り降りするだけの閑散としたものでした。

翌年入学した小学校は鶴沼小学校(当時は、藤沢私立第三国民学校といいました)

小学校には、毎朝、いまの鶴沼海岸商店街の中ほどにあった火の見櫓の下に集まり、六年生が持

つ竹竿の旗を先頭に学校へと歩いていきました。その竹竿には吹き流しのように布がつけられ、第五分団と書かれていました。集団登校の一人は、麦畑を通り、桃畑を通り学校へは一時間近くかかったと思います。帰り道で機銃掃射にねらわれたこともありました。空襲警報はかなり頻繁に出たと思いますが、敵機が上空を通過して行ったのだと思います。一度、敵機が燃えながら江の島の方へ落ちて行ったのを、近所の人々がガヤガヤと集まって、眺めていたのを覚えています。父が頑丈に作った防空壕には、駆け込んだ記憶は有りませんでした。

―父には一年中、監察がついていた―

終戦になるまでには、苦しいことはいっぱいありましたが、特に、私が受けた悲しい日々をことを記したいと思います。

私の父は、淀橋で東京交通局のバスの運転手をしていました。そして、その東京交通労働組合の支部長をしていた時、労組から推され区議会選挙に出馬、当選して、淀橋区議会議員になりました。が、その頃の政府は、アジア諸国への植民地支配と侵略行為を繰り返し、戦争への機運が強まっていた時でした。

『アジア諸国民と、日本国民を不幸にする戦争を止めよ』というビラを、労組が中心となり、全国一斉にまいた「人民戦線事件」で、父は逮捕・留置されました。一年余りの獄中生活の後、釈放、藤沢・鵜沼に来たのです。

鵜沼に来て、父は「松のみどりも深く、気候も温暖で、何より東京から一時間だ、今にベトナムとしてどんな商売をしてもうまく行くぞ・・」と思っていたようですが、まず、一番最初に現れたのは、特高警察だったのです。

その男は、何の前触れもなく夜昼かまわず現れます。あのチョビひげ、ずんぐりした体つき、私は、今でも忘れません。父と母は、「○○○〇・・」と憎悪を込めてその男の名前を呼んでいましたが、男が現れると、丁寧な言葉で応対する異常さは、子どもの私の心に暗い思い出として焼き付いています。

その頃、配給の食糧は不足していましたが、農村出の父と母は、朝早くから夕方薄くなるまで畑仕事をして、芋、麦、野菜などを作っていましたので、何とか食べるものはあり、それなりの一家団欒もあつたのです。が、そんな時に、あの特高の男が「やあー」と現れると、ゾーツとして家中の空気が冷えてしまいました。障子をあげ、上り端に男が腰をかける。冬は、そこに火鉢があり、架けてあるヤカンをずらし手をかざす。父は、何をしていても中斷し、その男の前に座ります。

と、必ず母も父の横にびったり座りました。

「どうかね戦局はー」と男。「まあねー」と父。

これ以上何か喋ろうとすると、母がそつと父をつつきました。余計な事を言うかと検挙されるからです。

男はしばらく世間話をした後、決まって家中を見廻し「やあー、珍しいものがあるな・・・」などと言いました。母は「どうぞ、どうぞ」と言つて、その男にその貴重な品を持たせて帰るのが常でした。男は、家の大切な物をせびり取つて行く憎い男でした。

戦争が終わつて、男はピタリと来なくなりました。それからどのくらい経つたか、ある日、外から帰ると、「玲子」と父に呼ばれ、前に座ると

「今なあ、治安維持法と特高警察廃止の放送があった・・・」と言ひ、「国のやり方や、特に戦争

に反対した人間を、この法律で捕まえ、留置し、拷問したり、釈放しても年中家に監察に来たり、ああいうことがもう無くなるんだ」と明るい顔で、でも眼に涙をにじませながら話してくれました。

日本軍国主義は、侵略戦争を進めるために、戦争に反対した学者はじめ多くの労働組合員などを検挙、拷問、虐待したのです。

父・大和田武は、もう他界しておりませんが、戦後第一回の一斉地方選挙で日本共産党の藤沢市議会議員となり、五期二十年間、市会議員をつとめました。

ヒロシマ

六十年まえの体験

佐藤 良生

(横浜市原爆被爆者の会)

爆心地から1km 原爆は六十年まえの八月

六日、広島市の上空約580mで爆発しました。

私はそのとき中学三年生、爆心からちょうど1kmの自宅でした。1km以内での生存者は極めて稀です。私自身、よく助かったと思います。

家族 その時、家には私のほかには母と中学一年の弟と五歳の妹がいて、この四人が潰れたわが家の下敷きになりました。父は朝早く出張に出、広島駅から東へ暫く走ったところで、原爆の爆発

の光を見ました。上の妹二人は、小学校の三年生と六年生で、集団疎開しており原爆に遭わずにすみしました。

周田・きのこ雲 私は幸運にも自分で這い出すことができず。その時に見た光景は忘れられません。見渡す限りの建物はすべて潰れ、2〜300m先には火事が起っていました。空は、火災の煙か土煙で薄暗く、時刻もわかりません。

「とんでもなく大きな爆弾にやられたんだ」というのが、そのときの実感でした。原爆というと、キノコ雲がいわれますが、私たちは、キノコ雲は見いていません。私たちはキノコ雲の足元にいたのです。

脱出 弟を助け出すのは比較的容易でした。母と妹とは同じ場所にいましたが、梁や柱に挟まれ救出はたいへんで、一時は、母は、私と弟に逃げ

るように言ったほどです。それでも、どうやら四人揃って避難することができました。妹はかなり重い怪我をしていました。火がすぐそばまで来ており、まさに着の身着のままでした。助けを呼ぶ声も聞いたと思います。

防火用水 電車を越えたところに市役所があり、その周りが建物疎開で空き地になっていました。市役所もやがて火を吹き出し、四方はみな火事で強い熱風が吹きます。防火用水に何度も飛びこんで体を冷やしましたが、着ているものはすぐにカラカラに乾いてしまうのです。水槽の水を飲んで吐いたことを憶えています。このことは体内に入ったかも知れない微細な放射性物質を排出する効果があったとも考えられます。その頃、広島では大規模な建物疎開が行われていました。動員されたのは十二〜十三歳の中学生・女学生で、

約七〇〇〇人が亡くなりました。

赤肌 夕方になって、とぼとぼと歩き、坐り込んでいるところを救援のトラックに乗せられました。荷台には何人かの人が坐っていました。半袖シャツの腕はやけどで赤裸、剥けた皮膚がポリ袋のような状態で、手の先にぶら下がっていました。トラックが揺れて、赤肌が触れ合うと、何度も悲鳴があがるのです。

父との再会 私たちは、広島湾内の島にある船舶隊兵舎に収容されました。原爆が投下された午前八時十五分は、人々が仕事を始める時間でした。家族ばらばらの人のなかで、四人が揃っていることは皆に羨ましがられました。

何日かして、父が収容所に尋ねてきました。家族の無事に涙を流したのは父の方でした。

脱毛 被爆から二週間ほどたった頃、髪が抜け

始めました。朝、枕にいつぱい付いており、頭に手をやるとバラバラと落ちるのです。それが放射能のせいとは考え付きませんでした。戦争中、男は大人も子どもも丸坊主でしたが、被爆した頭はつるハゲになってしまいました。時間が前後しますが、その年、昭和二十年の暮れころに、わずかに残っていた髪がまた伸びはじめました。根元が細く弱弱しく、先が太い頭でっかちの毛でした。

母の死 八月の末、被爆した四人に高い熱が出て、広島県北部の庄原で入院しましたが、母は入院の翌朝に亡くなりました。父は葬式を続けて出すことを考えたと後に話しました。

治療・妹の死 被爆者にどんな治療をすればよいのか分かっていませんでした。くすりもありませんでした。病名は原子爆弾症でした。私たち

は、健康な人から二、三日ごとにもらう血液を筋肉注射されました。

翌年三月にかなり元気になっていた妹が、急に様子がおかしくなつて亡くなりました。小学校入学の直前でした。

胃ガン・肝臓ガン（弟の死） 弟と私は、いろいろと病気をしましたが、どうやら生き残りました。しかし昭和四十六年に私は胃潰瘍といわれ手術を受けました。医者になつていた弟は私の手術に肉親として立ち会つたのですが、五年たつて、あれはガンだつたんだと言いました。その弟も肝臓ガンになり、国立がんセンターで二度の手術も空しく、昭和五十九年に亡くなりました。被爆から三十九年たっていました。被爆した四人のうち私だけが生き残っています。

三万発 世界には今、原爆が三万発以上もあ

ると言われています。アメリカは非拡散防止条約を提唱したのに、小型・強力な核兵器開発に力を入れていきます。核兵器は大きな爆発力、高い熱、そして恐ろしい放射線を出します。原爆を受けた人がガンになるだけでなく、子孫にも影響することがあります。

二十七万人・七十歳 広島・長崎で原爆を受けた人、後から家族を探すなどで街に入り放射能を浴びたと思われる人で、今、生き残っている人は日本中で約二十七万人です。今、被爆者の平均年齢は七十歳。横浜市にも約二千七百人の被爆者が居るのです。

被爆者の義務 原爆の恐ろしさを知ってもらい、それが使われないように、原爆を無くすように、日本だけでなく世界中の、特に、若い人たちに訴えることは、生き残った私たち被爆者の務め

だと思っています。世界中の人がお互いをよく知り仲良くすることが、原爆を無くし、平和な世界を作ることにつながると私は信じています。

あらゆる機会に「語り部」活動 私は主として横浜市内の小・中学校や市民、労働組合、婦人団体などで「語り部」活動を行なっていますが、機会があれば海外での活動もしています。二〇〇一年秋には同時多発テロの直後に、横浜と姉妹都市のバンクーバー市の高校生たちに呼びかけました。また昨二〇〇五年五月にはニューヨーク市で、七、八月にはベルギーでの平和行進に参加し、秋葉広島市長の「二〇二〇年までに、核兵器廃絶を！」に賛成の市長たち・一般市民に訴えました。体の許す限り、核兵器を無くし、戦争をなくするための「語り部」活動をするつもりです。

(2006.5.29. 追記、他誌にも掲載)

京急黄金町駅は

運命の現場

荒木 昭太郎

(辻堂東海岸在住)

昭和二十年五月二十九日、午前九時すぎからの二時間ほど、横浜市街の中央部は死の時空間となった。アメリカの戦略空軍は、しばらく前から大規模な夜間爆撃を東京、横浜、川崎その他に加えていたが、この日ついに、サイパン島からB29爆撃機約五百機、硫黄島からP51戦闘機約百機が飛び立って大編隊を組み、昼間の「じゆうたん爆撃」を行ったのだ。ザザーツという音とともに

殺到する何千トンの焼夷弾は、ほとんど木造家屋の市街に満遍なく降り注いだ。市街の周囲から攻撃が加えられたため、市民の大多数は逃げ遅れ、火の海の中を逃げまどったといわれる。燃え上がった焰と煙は赤と黒の奇異な巨大な動く塊となって空を蔽いつくした。

中学生のぼくは、この頃、鶴見の工場へ動員されていて、朝の空襲警報の一瞬前に横浜駅から生麦へ通りぬけていたから、この死の時空間に転がり込むきわどいところを逃れるいる。工場の中庭から仰ぐと、この黒煙の中にトタン板の断片のようなものが舞っていて、横浜がやられたのだと級友たちと話した。ぼくらは、帰宅の指示に従って国鉄東神奈川駅に正午頃辿り着いたものの、焼け野原の上を吹きすぎる烈風のアマリの強さに茫然と立ちすくんだ。黄金町、初音町、赤門町、境の谷あたりの町並みは、人々それぞれの思い出のよ

すがと共に、すべて消え去った。中村町も、伊勢佐木本町も、関内も、本牧も、平沼町も、反町も、みな焼けた。磯子の自宅に帰り着くまでには、北の郊外を大きく迂回し、保土ヶ谷から井土ヶ谷を経由しなければならなかったのだ。

この頃、妻の実家は黄金町の辺にあった。彼女も動員されて鶴見の森永チョコレート工場で軍隊用の包装作業を行っていたが、数日前の空襲で大釜ばかり残して工場は焼け落ち、今度は元住吉の機械工場へ出勤することになり、当日、気の疲れを押して家を出た。それが母親との別れとなったのだ。工場の監督の怖い声と表情を思い出して玄関を出たというが、休みを取ったとしたら、この日、彼女も母とともに猛火の中に消えたはずだった。

彼女の父は、神奈川県の木材会社に勤務していたが、この時、花園橋の下の川に入って道を火が

走る大火災を避けたという。彼は昔の関東大震災の混乱を見事切り抜けた人なのだ。立ち戻って我が家焼け跡の前に立ちつくしていた所へ、全行程をとぼとぼ歩いてやつと帰宅した娘に「お母さんは一緒ではないのか」と尋ねたその一瞬の情景は、こちらも涙なしには思い浮かべられない。

横浜大空襲の悲惨な場面から生き残った者たちはともかく、その火の中に失われた者たちの運命は何なのか。ほとんどが非戦闘員であり、庶民なのだ。彼らを焼き尽くし、川に入った者たちにまで機銃掃射を加えた行動と心理、またその立案と計画は、どういうところからくるのか。この日の死者の数すら明確に把握されてはいない。大量の、無名の、無惨な死だ。とりわけ悲惨なのは、「京急黄金町駅の階段で、一番下からホームまで、各段全部、死体で足の踏み場もなかったという。霞

ヶ丘にかかる市電の坂道も死屍累々の有様だった。焼けこげた死体は、髪の毛は抜け、皮膚はただれ、身体の一部は欠け、集められ、積み上げられ、置き放されてあった。そして、駅の横の囲いの中では、何日もの間、火葬の煙が絶えなかった。それらの情景は、人々の記憶から消えることはない。

その後、その場所に、あまりにも痛ましい数多くの犠牲者たちのため、子を胸に抱いたまま死んだ母の形の地蔵像が据えられた。疎開先で終戦を迎えた義妹たちが除幕の綱を引いたとき、現れた姿を見て、「わっ」と泣き出したとのことだ。この像は、そこでも何人もの人が亡くなった付近の普門寺というお寺に移されている。

妻は、語る。「誰が母を殺したかと問い、その罪と責任を指摘することはしない。報復へ向けて憎しみを保ち続ける自分を想像できないから」と。

この思いと決意に、忘却はなく、苦悩に満ちた乗り越えと前進への意欲がこもる。そして、その根底には人間への愛情が息づく。生きる働きは、その中から湧き上がるのだ。荒涼とした焼け跡を、むしろ明るい生活の空間と思ひ直して、彼女は、思いきり晴れやかに、走りだして行った。

戦争はいけない。力を尽くして避けなければならぬ。、つらく苦しくあっても、こののちに向かって、耐え、支え、人間全体の生きる場に、共生と共存のかたちを作り出さねばならない。

私の憲法

金田 富佐江

(片瀬在住)

小学校時代

昭和九年生まれの私は、「国民学校」第一期生。それまでの尋常小学校がこの年から記号「国民を戦争に動員するための教育」をする「国民学校」に変わった。軍国少年、軍国少女を育てるための学校生活は、朝の「奉安殿」最敬礼から始まる。それから朝礼で「テンノウヘイカは神様です」という話を校長先生から聞く。直立不動で姿勢を正して、下を向いて聞かなければならなかった。暑い日の朝はよくあちこちで気持ちが悪くなつてバ

タパタと倒れていた。寒い時期には鼻水をすする音がまるで合唱のように聞こえた。

その年の十二月八日、太平洋戦争勃発。学校は、勝った、勝ったと勇ましかった。真ん中辺りが日本の領土になっていて、真つ赤に塗られている世界地図を覚えていて。中国から南へ南へとのびていて、シンガポールまで赤く塗られた世界地図を黒板に広げて、「もう少しでオーストラリアまで日本になるのだ」と先生は得意気だった。でも私が四年生になった時には、本土空襲に備えて、集団疎開が始まった。縁故疎開をしない四年から六年の生徒は、全員が学校の決めた所へ疎開しなければならなくなって、私も六年の兄と一緒に群馬県の磯部温泉に行った。夜になるとホームシックになって一人がすすり泣きを始めると部屋中がシクシクと泣き出して大変だった。兄は一ヶ月で音を上げた。そこでは親への手紙は検閲があつて、

弱音をはくような手紙など出せなかったのだが、帰りたい一心の兄は教師の目を盗んで地元の子どもに親への手紙を託して、とうとう迎えにきてもらった。二学期からは愛知県の父の親戚の尼寺に疎開した。翌年の三月、兄は中学に入るため東京に戻り、代わって二年生になったばかりの弟が来た。ここでの生活は辛いことも多かったが、親の元にいたらとても出来なかった様な日常生活のさまざまな仕事を覚えさせられた。それは、後々迄役に立ついい体験だったと思っている。

八月十五日、従姉妹の姉さんが、学徒動員の工場から帰ってきて、「日本が無条件降伏」したことを教えてくれた。「ムジョウケンコウフク」って何のことだか分からなそうな私に「日本は負けたのよ」とひとこと言った。

三日後、父が迎えに来てくれた。弟と枕を並べ

て寝ている耳に響いてくるコツコツという石畳を踏む靴音がだんだん近づいてきた時、その靴音だけで、あれは父だとすぐに分かった。待ち焦がれていたからだ。なかなか買うことが出来ない汽車の切符を手に入れて、終戦と同時に迎えに来てくれた父母の想いが嬉しかった。私にとって一生忘れない出来事となっていて、いつ思い出しても胸がジーンとしてしまう。

中学生時代

中学も私たちから制度が変わった。六・三・三制の新制中学第一期生だ。東京の練馬、私の家の近くの高台に新しい校舎が建てられて、五年、六年と一緒に過ごした友だち全員そこへ移った。前年十一月三日に憲法公布、半年後の五月三日施行という時に中学生生活がスタートした。なにかも新しい。それに上級生がいないので、余計、自由な気分と解放感に満ち溢れるようだった。そこで

出遭ったのが、「新しい憲法のはなし」という中学一年生用に作られた社会科の副読本だ。それまでとは全く違う価値観に目を覚まされる思いだった。第二の成長期を迎えてちよびり大人になった私に、やさしく解説された新しい憲法の精神は、ごく自然に吸収されていったように思う。それは勇氣と力を、夢と希望を与えてくれるようなものだった。巷でも、「民主主義」や「男女平等」という言葉は流行語のように飛び交っていた時代だったので、難しいことを習っているという気など全然しなかったのだ。でもこの冊子は、僅か二・三年しか使われなかったというからとても残念。

あれから六十年。今、教育基本法が変えられ、平和憲法も崖っぷちにきてしまった。軍国主義の教育と民主主義の教育という全く正反対の体験をしてきた私たち、教育の恐ろしさもまた、教育の

大切さも体験している。

子どもたちに伝えたい。誰かにだまされなくて、世の中に流されなくて、自分の人生を精一杯生きて欲しいと。そして、私たち大人は、それが出来る様な社会を作り上げる責任があるのだと思う。



一家永 幸子一

祖父の戦争体験

―聞き書き―

渡邊 愛

(横浜国大付属鎌倉中2年)

祖父が戦争当時朝鮮に住んでいた時の状況について分かった。

昭和二十年八月十五日、日本は敗戦した。祖父は当時家族と共に朝鮮平安南道平壤府船橋里(平壤、現在ピョンヤン)に住んでいた。この一角は日本人の裕福な家族が多く住んでいた。平壤は軍需品、食糧、鉱業、工業の中心地で物資を調達して日本へ送っていた。祖父の父はその物資の調達や日本への送付についての仕事をしていた。平壤

の商工会議所の役員として勤務していた。八月十日頃から平壤の駅を関東軍のえらい人たちを乗せた軍用列車がよく南下していったので、不思議に思っていた。一番先に逃げたのである。

祖父は当時中学二年生だった。昭和二十年八月二十三日祖父の父は朝鮮共産党に拘留された。

朝鮮の経済攪乱罪ということだった。昭和二十二年春に釈放されるまで一度の裁判もなく、日本人に対する見せしめ逮捕だったような気がする。

残された家族、母(三十九)、兄(十六)、祖父(十四)弟(十二)、妹(0歳)の五人は途方に暮れる間も無く、侵攻してきたソ連軍により我が家は宿舎にするために没収された。八月末日午前十時の通告、午後三時の明け渡しを宣言された。ここから祖父たち家族の戦争は始まった。短時間の中に住む場所を決め、荷物、食糧、お金などを

出せるだけ頑張ったが、父親がいなのは大変だった。父の勤め先の事務員が自分の家族があまりながらオンドルの四畳半一間を貸してくれたのは大変ありがたかった。その部屋には翌年の八月まで住むことになった。

食糧を得るためのソ連軍の使役に兄と二人で出て雑穀などをもらった。祖父兄弟は体格が大きく大人と同じ使役をさせられながら子どもだということでも二人で一人前の分け前しかももらえなかった。とてもくやしかった。仕事の内容は週に四日位ソ連軍の下士官の住宅での雑役、荷物運び、倉庫の片付けなどだった。

冬になると満州から引き揚げてきた開拓団の人たち、特に子どもが多く亡くなった。朝、荷車にコモを敷き、遺体に乗せ、またコモを掛け墓地に埋葬した。さすがに子どもにはさせなかったが、冬など地面が凍っていて土が掘れず雪をかけるの

が精一杯だったそうだ。

昭和二十一年六月、引き揚げの話があった。八月の雨の夜、約一〇キロ離れた寺洞駅から乗車というだけで持てるだけを持って出発したが、途中で濡れて重くなり多くの荷物を道に捨ててきた。これは朝鮮人の嫌がらせ、作戦だったのではないかと思う。

九月になって祖父の住んでいたグループ約七〇人の引き揚げがようやく始まった。集合は前と同じく一〇キロ程歩いた寺洞駅であった。屋根付き貨車に乗せられ夜出発して黄海道妙理院という所に昼頃着き、今度は屋根のない貨車に乗り換えさせられた。今まで真つ暗な貨車の中にいたので、青空と空気がすばらしいと感じた。

なかなか出発しないでしたら「今近くの地方にコレラが流行しているので南下できない。しばらく滞在する。」といつて海州という所の近くの農

村で降ろされお寺に収容された。ここでもソ連軍・人民軍や役場の使役に使われた。後で考えしてみると労働力が欲しくてコレラの名前を使ったのではないかと思う。

二ヶ月程たつて出発許可が出たが、ここから先は歩きとのことであつた。食糧をどうしたのか記憶がない。母はずいぶん心配していたと思う。夏の服装でわずかな荷物を背負つて山道を進んだ。大きな道を歩けば朝鮮人が関所を作つて目ぼしい物を取られた。夜道の怖さ、狼などの目の光、藤原てい氏著の「流れる星は生きている」という本に書かれているのと同じような怖い目にあい、途中かなり大きい川を歩いて渡つたりした。祖父の母は幼子を背負つて一番苦労したと思う。(食事、オムツ、また母自身も体調を崩していた。)二週間ほど歩いて山の上から開城の町が見えてきた。

38度線の南側に人つたので、ほっとした。

日本人収容所は何千人も入る大きなテント村だつた。寝る場所は一人半畳くらい、土の上にも寝ていた。食事は貧しく、とうもろこしのおかゆが一人湯のみ半分、一日二回であつた。相変わらずひもじかつた。祖父は朝鮮語が出来たので鉄条網の外からよく声をかけられた。「うちに来ないかい。食事は腹一杯、うちの子にならなないかい。」と誘いの声は多かつた。労働力として欲しかつたのであろう。お腹がすいたのでゴミ捨て場で大根のしつぽやへたを拾つて食べているのを見られたのであろう。

検疫のため一週間ほど止め置かれた。貨車ではあつたが乗車したら一直線に釜山港に向かつた。釜山港では、給食の手伝いを志願した。食事はコウリヤン(あずきが小さくなつたような赤い雑穀)に油を入れて炊いたものでとてもおいしかった。配りながら何度も何度も口にほおばり大満足

した。釜山港では待つていた船、興安丸にすぐ乗船した。その時の気持ちは、うれしくてうれしくてやつと帰れるなど思った。

引き上げ船の上ではDDTの消毒、検便など十日間ほど止め置かれ、やつと上陸が許された。その時の祖父の服装は夏の半袖が一枚、軍用の夏ズボン、朝鮮ワラジ、破れたソ連軍の軍靴を履いていたが朝鮮ワラジと交換させられた

日本の土を踏んでほっとした。博多では一人当たり二〇〇円、家族とし一〇〇〇円を支給された。今後の生活はどうなるのだろうかと思った。母の妹が大分県の日田市に住んでいたのでそこで一ヶ月程静養し、父の実家のある常滑市に帰った。父の両親と生活を始めた。

翌二十二年十一月末に父がひよっこり帰ってきた。平壤で釈放され元山から船で舞鶴に着いたようである。ここからが日本での戦争が始まった。

祖父の両親は四人の子どもの教育を最大の目標にして日夜働いて相応の教育を受けさせた。

「幸い私の一家は家族全員無事だったが、戦争は全ての人を一瞬のうちに悲劇のどん底に落とし、悲しい思い出のみ作っていく。何があっても戦争は避けなければならぬ」と祖父は言っていた。



—野口千代美—

サイパン島から来た

松本ヒロちやんのこと

熊崎 勝弘

(亀井野在住)

終戦の前の年の春、ヒロちやんは突然私たちの前に現れた。色白でどこか飄然としてよそ者然としていた。当時東京の下町に住んでいた私たちは『「二長町少年攻撃隊」というヒットラー・ユージェントを真似した少年団をつくっていた。隊旗もつくり、当時大きな軍事工場で資材関係の倉庫番みたいな仕事をしていた私の父親が工面して全員おそろいの緑がかった隊服や制帽もつくり、毎朝、そして日曜日には兵隊ごっこごごのまねまねごとごとに精を出

していました。それまでの三角ベースの下駄バツターの野球、メンコ、ベー独楽遊び、悪漢・探偵ごっこ等はかげを潜めて中学校の上級生が将校格で、私たち中学の二年生はさしずめ下士官の立場で学校の軍事教練で教わったことをそのまま小学生のこども達にやらせたり、毎朝の駆け足（今で言うジョギング）や神社の境内の清掃などを真面目にやっていた。

ヒロちやんはそんな私たちの仲間にすぐには入らないで私たちの輪の外で淋しそうにしていた。私はヒロちやんが何処の家の子なのかも判らなかつた。その当時からそのような子を黙って見ていくことの出来ない性分だった私は、母に相談したら、私と同じような気性の母も二つ返事で『連れて来な』と言うので、ヒロちやんは私の家に遊びに来るようになり、時には夕食も私の家で食べる事もありました。そしてヒロちやんの身の上も判

るようになったのです。

ヒロちゃんの話をきくと、ヒロちゃんは「両親と小学生の妹さんと四人で平和に当時日本の委任統治下にあった南洋諸島のサイパン島で暮らしていました。小学校を卒業すると、男子の中学校がサイパンに無かったので近くのパラオ島の中学に進学したのです。親元を離れた寄宿舎生活でした。私より一級上の三年生でした。それからアメリカの潜水艦の動きがだんだん活発になって、島と島の行き来も難しくなり、「両親や妹とも会えなくなりました。ある日、パラオ島から内地に直行する最後の船便が出るというので、お父さんからの指示でヒロちゃんだけで東京へ帰ることになり、私の近所の親戚の家にやって来たことが判ったのです。

ヒロちゃんは家族に会いたい、淋しいという気持ちと闘いながら、私たちの少年攻撃隊にも

参加して少しずつ元氣を取り戻していくようにした。ところがヒロちゃんの悲しみはすぐにはやってきました。それは後退を反撃に転じたアメリカ軍が六月十五日に大挙してサイパン島に上陸作戦を展開したのです。膨大なアメリカ軍の戦力と物量作戦の前に日本の守備隊は一ヶ月も経たないうちに壊滅させられました。日本側の戦死者は守備隊と邦人居留民合わせて五万五千人、原住民九百人、アメリカ軍五千人の命が消えた壮絶な一ヶ月間の戦闘でした。

日本の大本営(軍の最高指揮所)はこの敗北を一ヶ月以上も国民に隠していて、八月の十八日に発表しました。丁度その時、ヒロちゃんは私の家で私の家族と一緒に夕食を食べていました。突然ラジオから『海ゆかば』のメロディが流れてきたのです。ヒロちゃんの顔に緊張が走りきました。

『大本営陸海軍部発表、帝国陸海軍サイパン島守

備軍は、居留民と共に全員最後の突撃を敢行せり』はつきりと記憶していないが、おおよそそのような発表でした。色の白いヒロちゃんの顔からスーツと血の気が引いていくのが判りました。私の家族も食事を中断して黙ってしばらくの時間が経ちました。『僕、帰ります』と言ってヒロちゃんはすつくと立ち上がって帰っていきましました。その後も私の家族は誰も黙っていません。見ると母は目に一杯涙をためていました。いつもふざけてばかりいる弟が『玉砕って言わなかつたから大丈夫だよ』と言つても誰も返事をしませんでした。

アメリカ軍は占領した、サイパン、パラオ、テナヤンの島に次々と大きな飛行場を建設し、そこから飛び立ったB29が東京大空襲もやり、ヒロシマ・ナガサキの原爆もそこから発進したのです。あれから六十数年たちました。毎年この時期にな

ると思い出すのです。ヒロちゃんの姓は松本でヒロちゃんは宏か浩か博かわかりません。戦争が終わってから私はアメリカ軍が撮影したテレビの画像で、アメリカ軍に追い立てられて島の端まで逃げてきた居留民の女性が、次々と断崖絶壁から身を投げるシーンを何回も見せられました。そうです、アメリカ軍が名付けたバンザイ・クリフです。丸坊主の男性の居留民が背中に赤ちゃんを背負って全身をふるわせているシーンも見ました。

ヒロちゃんが住んでいた家もあれからすぐに戦いで焼けて、わたしはそれ以来ヒロちゃんには一度も会っていません。サイパンの家族と再会はできなかつたと私は思います。

戦争による殺戮がいかに無意味なことか、いま軽々と戦争のことや、九条改悪を口にする若い政治家たちに今一度考えなおしてほしい。

乃木高等女学校から 横河電機へ学徒動員

匿名

(横浜市在住)

昭和十七年、大東亜戦争が始まって間もなく、私は乃木高等女学校（現在、湘南白百合学園）へ入学致しました。「謙遜に、従順に、勤勉に」と校則にありますように、おしとやかな女らしい学校にあこがれ、胸をふくらませておりました。校内の清掃が行き届き、ぴかぴかに床が光っているにはびっくり致しました。

そのうち、だんだん戦争が激しさを増し学舎で勉強出来たのも二年生まで。二年生の終わり頃に

は勤労奉仕が始まりました。午前中の勉強を止ませると、スコップや鍬を持って、松根油を取るため近くの松林に行き松の根を夕方まで、汗びっしりになりながら掘りました。授業も難刀や軍事教練が加わりました。その頃サラリーマンであった父にも召集令状が来て、四十二才の高齢にもかかわらず陸軍少尉として南支へ出征いたしました。

三年生になるといよいよ学徒動員です。辻堂にあつた横河電機に行くことになりました。国民が皆一つになって戦えば必ず戦争に勝つと信じていた私達は、お国のために働くのはあたり前のことと思っていました。マスール方は、上下のもんぺ姿、私達は制服の上着にズボンという格好でした。現在のように交通機関が発達していませんでしたので通勤に時間がかかり、朝六時に家を出て夜八時頃帰宅するという毎日でした。私は生産二課と

いう職場に配属され、そこは飛行機のメーターの組み立て、検査、修理を受け持っている課でした、出席簿順にクラスの七く八人が一般工員の中にはいました。

まずハンダ付けの練習からです。小型のハンダ鏝にやすりをかけ、きれいに磨くことでした。鏝をきれいに磨かないとハンダが付きません。ハンダ付けをする所に極く少量の松脂をつけ、ハンダを左手に持ち、熱くした鏝をあて少量のハンダを溶かしてハンダ付けをします。小さい所のハンダ付けなので、表面がざらざらになってしまつて中々うまくいきません。練習を重ねていくうちにこつを覚えてきました。ハンダを少し溶しながらつけ、鏝をあて動かさずにタイミングをみてさつと離すと、ぶつくり光つた小さな玉になつて綺麗にハンダ付けが出来ます。わずか二ミリ程の場所なので、綺麗に出来た時は本当に嬉しゅうござい

ました。ハンダ付けの練習が終わりいよいよ仕事開始です。

今の若い方達には考えられないこともかも知れませんが、女子校でしたし、「男女七歳にして席を同じゅうせず」という時代でしたので、男子工員さんと二人一組になつて仕事をすることは憂鬱なことでした。二台の機械を使いメーターの針が正確に作動するのを確かめるのに、定められた場所に針がくると、大きな声で「イマー、イマ、イマ」と言うのです。初めのうちは中々大きな声が出ずこまりました。私たちが組み立てたり修理したりしたメーターで、飛行機が無事に飛んで任務を果たしてくれることを祈りながら、一生懸命働きました。後輩の方々、2度と戦争が起こらないよう、平和なよい日本の国を創つて下さい。

(文集「戦争と湘南白百合学園の生徒たち」より転載)

戦争中は何を食べたか

庄司 羌子

(本鵜沼在住)

今からほぼ半世紀余り前といえば、昭和十八年前後、第二次大戦はまさに酣わだった。食糧は乏しく主食の米は、大人一人当り二合三勺(一日当り)の配給が数年前から実施され、働く者にとり日々不足の連続である。米の代用として、さまざまの物が配給されもし、又各戸自ら買出しして食べた経験は、その頃を生きた人々にとり、忘れられぬ記憶であろう。

どこの家でも、食糧の買出しに苦勞しない家は皆無と思われる。さつま芋、南瓜は主食代わりで

配給もあつたが、我が庭や空地を耕して作るが、作り手は素人、作物に土地が合わぬ、肥料は無いで、美味しく出来る筈も無く、甘味の少ない、水気の多いそれらを、食べねば生き通せぬが故に、黙々と口に入れねばならないものだった。

少しでも嵩を増やすために、かの有名な「オシン」ではないが、大根の千六本が入ったし、サイコロ切りのさつま芋入りは、口当たりの良さで大根飯を数倍凌いだ。又、三度に二度は、おかゆ、おじやにして米の量を押さえて食べたり、汁に小麦粉団子の人った「すいとん」、長方形の底の取れる木枠に内側二面に金属板を張りコードを繋ぎ、小麦粉を水で練ったものを流し込み、電流を通して水分をとばして出来る「電気パン」、乾燥したさつま芋を粉に挽き、水で挫ねて蒸した「芋団子」、果ては不足してきた米の代わりに配給される「コーリヤン」の固い赤い粒を、

如何に軟らかに煮て食べるか、食事を作る者の頭痛の種だったと思う。

副食のたぐいは、四つ足の肉類は皆無で、「すけそう鱈」とか「鮫」「小魚」などが配給された。醤油は「アミノ酸の代用醤油」、塩はあれども砂糖は無く甘いものには飢えていた。なんだったか行事の時、母が大切にとつておいた小豆で「お萩」を作った折、窮余の策で塩で味付けした塩餡でくるんだのには、さすが私も吃驚で二度と食べたいと思わなかった。母の「塩餡というものもある」という説明を聞きながらも……。

野菜も何種類か配給があったと思うが、自身女学生で、細かい所はわからない。ただ学校の授業で食用になる野草を教わり、「野びる」や「はこべ」「アカザ」などを採って食べた覚えがある。

「野びる」は風情があるが道端の野草はおおむね「アク」が強くて食べにくい。又さつま芋の葉柄

を煮付けたものは「ぜんまい」のようで食べられぬものでもないが、恐ろしくヌルヌルしている、今、食べたいというものでは到底ない。

通学の身であれば、ではお弁当はどんなだったか、と言われると、これも半世紀を過ぎてみると、殆ど記憶にない。ただ、毎月「一日」は戦地を偲んで、梅干しを真ん中に埋めた「日の丸弁当」が決まりだった。毎日それに準じて、侘びしいお弁当だったにちがいない。

たまたま叔父が、南方からの品物だと、小指の太さの細長い「乾燥バナナ」（私には色といい、形といい、バナナのミイラに見えたが）を持って来てくれ、その天然の甘さと香りを、久し振りに美味しいと感じたことを昨日のこのように覚えている。懐かしい「チョコレート」や「キャンデー」「苺のケーキ」等々絵に描いて思えばいたこともある。当時はそれらはみんな、夢の又夢で

しかなかった。

育ち盛り、沢山食べたい十二・三才の頃だったが、親を始め、日本中の人々が凌ぐ状況は、私達皆、理解して過ごした日々だったと思う。しかし、飽食の時を過ごしてきた現在、あの戦争中のことが、厳しかった食糧事情も含めて、何だったのか、と思うことさえ情けない思いに駆られる。

もう二度と戦争にはまき込まれたくはない。肉親知人を戦場にとられ、爆撃機におののき、学生ながら学業はまっとう出来ず、衣食に飢えた我々としては。

(文集「戦争と湘南白百合学園の生徒たち」より転載)



一岩田圭子一

幻のコロネット作戦と

軍国少女

芝 実生子

(片瀬在住)

空腹、寒さ、緊張、不安……辛いことの連続だった戦時体験の中で、いま考えると何より恐ろしいのは、私たちが完璧な軍国少女に仕立て上げられていったことだと思う。

敗戦直前の六月も末になると、空爆の対象は小都市に向けられ、平塚、藤沢にも被害が及んできた。増産を急がされてきた職場の、ターレット旋盤で飛行機のネジを作る私達の所でも、資材が途切れてきた。モーターの轟音がピタと止んだ。威

勢のよかった大本営発表にも玉砕の報が入り、人と物資の根こそぎ戦力化と、本土決戦の心構えが呼びかけられた。

学徒報国隊は工具を竹槍に持ち替えて、上陸する敵を迎え撃つことになるのだろうか。情報はなくとも、私達に確実に死が迫っていることを実感する。資材が無くて手持無沙汰になった職場で

「綺麗に死にましようね。乃木高女の生徒らしく。」小声で淡々と交わされる女学生の会話。余りにも短い人生。しかし幼い時から教えこまれ、社会が求めるとおり、天皇のために生まれ、死ぬのだから、竹槍で戦うことの不安はあっても悲しくはない。誇らしく充実した気分だった。兄は戦地。従兄弟だつて神風特攻隊で死んでいる。聖戦を戦って天皇に命を捧げることが、強制ではなく、自ら選んだ道に思えた。完璧な軍国少女に育っていた。

戦後明らかになったアメリカ軍の相模湾上陸作戦Ⅱコロネット作戦は、湘南海岸から上陸して東京を冠状に包囲し、無条件降伏を引き出すための最終戦争として位置づけられ、九州方面上陸のオリンピック作戦と空からの波状攻撃を伴う、兵力一〇〇万規模の大攻撃計画であった。日本軍も大方これを予想し、アメリカ軍の東京侵攻を遅らせるための捨石として、子供を除く男六十五才、女四十五才以下を、義勇隊に編成する準備が進められた。勿論住民に避難する選択などあり得ない。今も市内に数多く点在する壕や砲台跡、母校に駐屯していた護東部隊、数々の軍事施設など。敵の相模湾上陸を予想しての布陣だった。原子爆弾のマンハッタン計画の実験成功により、七月半ばアメリカ軍は、急遽コロネット作戦を、戦力消耗の少ない原子爆弾投下に切り替えた。もし広島、長崎の原爆投

下が無ければ、コロネット作戦の正面攻撃を受けて、私達のいまはなかったかと思うと複雑である。

軍機密とはいえ、何も知らされず、ひたすら命令のままに、けなげに生産に励む私達の上に、ひたひたと危機が迫っていたわけである。兵隊であろうと、愛国に燃えた青少年女であろうと、軍にとつて、その存在は防波堤の石コロの一つに過ぎなかった。しかも軍は一方で、サイパンから沖縄までの連敗の挙句、和平交渉を探りつつの時期でもあった。むなし。

しかし、私達の戦時体験がいかに辛く、命がけであったとしても、被害者顔をきめこむことはできない。学校で習った神話から一続きの歴史ではなく、事実の歴史に自分の体験を重ねるとき、当時の私達の位置と、果たした役割がみえてくる。聖戦ではなかった。認識したくなくても間違いな

く侵略戦争の片棒を担いだ者なのだ。軍国少女を含む大多数の国民の支えなしに、あの戦争はなかったのだから。

歴史は戻らない。ならば、せめて次の戦争を食い止め、小さな力ではあっても平和を築く努力こそが、過去を教訓とする者の生き方ではないかと思う。

(文集「戦争と湘南白百合学園の生徒たち」より転載)



一家永 幸子一

満州で現地召集された

父とおじのこと

小林 麻須男

(亀井野在住)

―戦死したおじ―

私のおじ、鶴太は、父の一番下の弟で、私の家族と一緒に十六才の時満州に渡りました。そしてジャムス医科大学に入学し、医者を目指しました。しかし、昭和二十年、学徒動員で軍医として召集され、終戦の日の前日、八月十四日、ソ連との国境、興安総省西口という所で戦死しました。戦死を目撃した仲間の軍医の話だと、負傷した兵隊の治療をしていたが、日の前で倒れた兵隊がおり、

負傷兵を助けようと塹壕から出て行った時、敵の一斉射撃が起こり戦死したとのことでした。

もう一日生きていれば、八月十五日の終戦の日を迎えたのに、終戦の前日、あたら若い命を北満の地で落としてしまいました。享年二十三才、生きていれば、医師として立派な人生を送る事が出来ただろうと思うと、残念でなりません。

―シベリヤ抑留列車から

逃げ帰った父―

また、私の父も、昭和二十年六月に満州で現地召集されました。そして、終戦を軍隊で迎えソ連の捕虜となったそうですが、父は、シベリヤ抑留列車から脱走し、逃げ帰ってきたということでした。父の話によると、父の所属していた部隊が終戦となつてソ連軍に武装解除され、「日本に帰すから汽車に乗れ」と言われたが、どうも行き先がおか

しいので、ソ連領に入る前に、列車から飛び降り、逃げて帰ってきたとのことです。父は、中国語ができたので、中国人と思われ、怪しまれなかつたという事です。私の開拓団では他にも十数人が、シベリヤ抑留列車から逃れて、帰ってきたとの事であり、母は、そんなに簡単に軍隊から逃げ出すことが出来るのかと思ったという話を話していました。

父は、昭和四十七年に亡くなり、今はもうおりませんが、五歳の私が満州から帰ってこられたのも父がシベリヤ抑留列車から逃れ、開拓団に逃げ帰ってくれたことが、大きく幸いしていたように思われてなりません。もし、父があのままシベリヤに抑留されていたら、母はこの私を女手ひとつで日本に連れ帰ることができたでしょうかと思わずにはいられません。

―根こそぎ召集された開拓農民―

戦死したおじや父たち開拓農民は、終戦の直前、関東軍の主力が、内地や南方に引き上げてしまい、その穴埋めに現地召集されたものです。昭和二十年五月ドイツが無条件降伏し、ソ連軍が満州に攻めてくることを予測した関東軍は、同年六月に、二十五万人もの壮年開拓農民を根こそぎ召集し、正規軍と入れ替えました。

私のいた開拓団でも総勢九〇〇名の団員の内一三〇名が召集されました。そして、現地召集された開拓農民の多くが、ソ満国境の戦闘で戦死し、また、捕虜となってシベリヤに抑留されました。

―取り残された残留孤児たち―

今、日本人孤児のことが問題となっていますが、あの人達の多くは、父親を現地召集で軍隊にとられて、終戦時には開拓団には、年寄りや婦人、子

供だけが残され、そこにソ進軍や現地の匪賊に
攻め込まれ、ちりぢりになってしまった人たち
です。そして、逃げ惑う中で、小さい子供達が
次々と死に、やむなく死ぬよりはましと、現地
の人に預けられた人たちなのです。関東軍が引
き上げず、終戦の直前に開拓農民の召集がなけ
れば、もつと多くの子供たちが死なずに、又残
留孤児とならずに日本に帰ってこられたのでは
ないかと思うと、残念でなりません。



—渡辺王子—

戦争より生きて帰って

―日本軍隊の実態―

矢口 仁也

(平塚市在住)

アジア太平洋戦争(一九三一年―一九四五年)にかかわった者として、戦争、日本国軍隊の実態の一部を述べてみたいと思います。

私は、中国の徹底した抗日、排日の抗戦によって日本の中国侵略戦争が思うようにゆかず、更に、一九四一年十二月八日の米英との戦争開始により日本の戦力が衰えてくるにつれ、それまで延ばされていた文科学学生の徴兵猶予が、一九四三年(昭和十八年)に廃止され、十月に徴兵検査を受けさ

せられ、学徒として十に月二日、ヒロシマの宇品に集められ、陸軍船舶工兵に編入されました。十二月七日、突然、夏服が支給され、貨物船に乗せられ四艘で関門海峡に至って漸く南方要員としてフィリッピンのセブ島行きが知らされました。

ここから、船内生活とセブ島の初年兵生活の実態を述べます。貨物船の中は、船底に三段階の寝所が作られ、そこがすべての生活の中心でしたが、一人当たりの居場所が狭くて仰向けに寝ることができず、換気施設も無く、人いきれ、トイレ、炊事関係、貨物倉庫などの混合したたまらなく臭い、空気によって、最悪の健康状態で耐え抜かなければなりませんでした。当然、何人かの病人がでて、八人位の仲間が亡くなりました。このように生活環境としては最悪の初年兵待遇でしたが、ただ一点、一等兵、上等兵などの上官が少なかったため、

軍隊的階級の上下關係に縛られずに学徒兵の仲間として自由に話し合いができ、ストレスの溜まらない余裕があり、最後の人間としての存在が生きておりました。

船団は八ノツトののろい速度でしたが、不思議なことに沖繩、台湾沖も無事に過ぎて撃沈の恐ろしさも経験することなくバシー海峡にはいりました。しかし、この海峡で仲間八人の死体を沈め、汽笛を鳴らしながら一回旋回の弔いをした悲痛な思いと、このドス黒いバシー海峡で、初めて敵潜水艦の攻撃を受け、死を覚悟して動き回ったことの必死さを忘れる事ができません。幸いにして、撃沈されることなく、コルヒドール島、バタアン半島を見てマニラ湾に着くことができましたが、湾には思いも掛けず多くの艦船が撃沈されておる姿を見て、改めてバシー海峡の思いを現実的に深くしました。

目的地セブ島に無事着いたのは四十四年（昭和十九年）正月早々でした。直ちに各分隊に分けられ、比島人の床上げ式の民家に居住することになり、ここを根城にして三ヶ月の軍人生活が始まりました。比島派遣軍砲部隊の一員となり、船舶工兵として大発、小発の上陸用舟艇を使つて敵前上陸兵士輸送の激しい訓練が始まりました。分隊の構成は、分隊長（軍曹）のもとに上等兵、一等兵数人、われわれ新兵（二等兵）という構成で、特に内務において所謂「軍人魂」入れの筋道を超えた仕打ちが行われました。入隊時に言われた一等兵からの「おまえらは娑婆にいるときはいい気になっていたが、ここは違うぞ。徹底して軍隊魂をたたき込んでやるから覚悟しろ。俺はノモンハン生き残りの一等兵だ。」と憎々しげに浴びせられた言葉は忘れられることはできません。この言葉は、その後鉄拳

制裁、無時間ささげ銃・腕立て伏せ・直立不動などの理由のない制裁が加えられ、その為に顎・鼓膜・口内の破傷をひきおこすなどのはかり知れない身体的影響を生ずる結果となりました。これに対して訴える術は全く無く、これによつて軍隊魂が鍛えられるのだという考えが日本軍の骨髄となつており、上官に対して一切抵抗し批判することは許されないという日本軍隊の縦系列の差別支配がもたらされたのであります。このような身体的衝撃は人間としての批判力を喪失させることによつて縦系列支配の軍統率をねらつたものと考えられます。

もう一つ大切なことを簡単に述べますと、現地においての殆どの日常物資は、現地人からの調達によつて賄われていたのではないかと考えられます。それは、私が食した砂利入り御飯、水牛の肉、芋類、椰子酒等から考えられます。何故かと言ひ

ますと、日本人に対する人気が余り感じられない雰囲気であり、外出も厳しく制限されていたことから、思えました。

私のささやかな経験から分つてもらえらると思ひますが、日本の軍隊は皇軍と称しながら論理と批判の全く通らない人間性を無視した縦系列の差別的な国家中心の侵略組織であつたということです。結局、軍隊というものは人殺しの組織以外の何者でもないということ深く自覚しなければならぬいし、このような組織では、人類・人間の眞の幸福・平和の実現を達成することは不可能であります。そして、直接戦争に参加しなくとも、日本人は、歴史的に加害者としての自分から絶対に逃れることは出来ないことを深く心に刻み込んで、フリッピンの皆さんに謝罪の姿勢をもつて生き抜かなければと念じております。

戦いやんで

佐川 光郎

(湘南台在住)

わたしが軍隊に入ったのは、昭和十八年二月、太平洋戦争真っ直中の頃でした。その頃の時代は、徴兵制という制度があり、日本男性は満二十才になると兵役の義務がありました。当時、わたしはまだ二十才にはなっていないままでしたが、陸軍現役兵を志願しました。理由は、永年続いた戦争を一日も早く終わらせる為でした。

部隊に入って最初に到着した所は、中国山東省済南市で以降同省の沂洲棗莊泰安曲阜と駐屯地が変わりました。主要都市は支那特有の城壁に囲まれており、住民は東西南北の城門から出入りす

るようになっておりました。当時の中国は支那事変より五年も経過しており、ましたが、まだまだ平和とはいえず、都市以外の地方に行くのと八路军（パーロー）や国民軍との戦闘が随所にありました。今思うと、現在のイラク戦争で、アメリカが苦戦している状況が、伺えます。戦場では、「作戦」と「討伐」とに別れており、「作戦」は師団主体で兵員は一万名以上で行い、「討伐」は中隊以下で行動し、日数は前者は数ヶ月、後者は数週間で終わりました。

昭和十八年十二月、軍の命令で部隊は南方方面に派遣となり移動のため列車で上海市に集結、数日後に近くの呉淞港より輸送船に乗船しました。同港沖に出たときは、二十数隻の堂々たる船団で、空には護衛の航空機が、海上周囲には護衛艦船で一路南下しました。途中、台湾の高雄港、香港、仏印のサイゴン港、シンガポールのセレタ軍港に

寄港し、その度に第一番に軍馬を上陸させ運動させました。サイゴン港を出港すると船団の数は急に少なくなりシンガポールのセレーター軍港に入港した時には、二艘のみで、他は別の戦場に向かったようでした。ここからの海上の状況は悪く、輸送船でのマラッカ海峡北上は困難の為、軍艦「北上」「キヌ」という巡洋艦に乗船し、海軍と共同で時速三十五ノットという高速でマラッカ海峡を通過しました。目的地であるインド洋アンダマン諸島ポートピア沖に無事到着、上陸用舟艇に移乗し南アンダマン島に上陸しました。時に昭和十九年三月、前年十二月に上海港出航以来実に三ヶ月の日数を要したわけですが、それから、同島内での生活が始まりましたが、何しろ島数は五十以上もあり、その内住民が住んでいる島は三つくらいで他は全部無人島というところでした。歴史的に有名なアンダマン刑務所は

ここにあり、中を覗くと、薄暗い部屋で、窓は鉄格子、室内は独特のコンクリート造りでガラシとしていました。現在、アンダマン諸島はインド領になっていますが元々はビルマ領で、戦前はインド・ビルマ両国の政治犯が刑務所に送り込まれていました。

同島で二年間、軍務に従事し大きな戦闘もなく、昭和二十年八月、同島で終戦を迎えました。

終戦後は、連合軍の命令で同島に駐屯していた陸海空軍一万五千名は、十二月にシンガポール南方のレンバン島に集結、帰国の指示を待ちました。

そして、翌、昭和二十一年五月、帰国の指示があり、アメリカのリバーティー船に乗船、約十日後、和歌山県田辺港に無事入港、復員しました。

以上が、私の軍隊生活ですが、再び戦争に行かなくて済むよう、憲法九条は大切にしなければなりません。と思っています。

九条を守ることは

終戦を守ることに

朦朧泡

(大庭在住)

沖繩も連合軍の支配下に入り、次は本土上陸、相模湾のどこかに、そんな話が人々の間に密かに囁かれました。

米軍の爆撃は、ますます激しく、そして、八月六日、八月九日の広島・長崎への原爆投下。

「白いものを身につけていれば、大丈夫」そんなことを知ったかぶりに言う人もいた。

話は前に飛びますが、まだ第二京浜国道(弾丸道路と当時の人々呼んでいた)が出来る前、鶴

見川の橋さえトロッコしか渡れない状態、そのそばに未完成の軍用列車の列、赤さびに覆われていた。このくず鉄を作るために、何人の人々が銃後の戦士として徴用され、家族と引き離されたことか。

私は、軍事教練で、富士の演習場に連れて行かれたことがあります。

「この銃は、天皇陛下から賜れた物、絶対に粗末に扱うな」

ところが、サクジヨウという銃の中を掃除する棒を、無くしたか盗まれた一兵卒が、演習場のトイレで首をくくって自殺するという事件がおこりました。夜な夜な、その幽霊が、「サクジヨウを返せ、サクジヨウを返せ」の声、私たちは怯えました。

さて、ポツダム宣言受諾後、軍閥達は勿論、軍も証拠を消すため、関連する物を川や海に捨てた

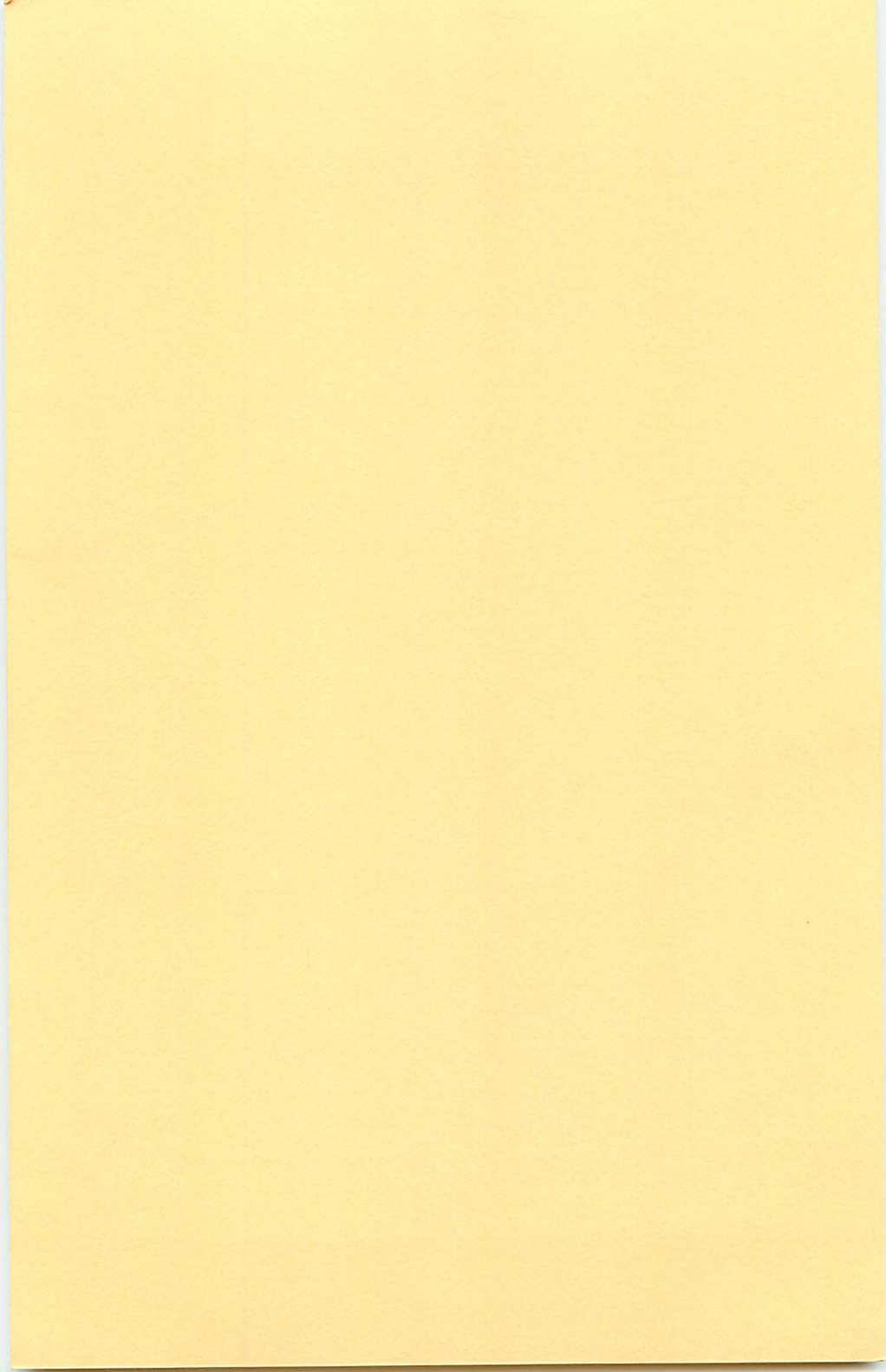
のです。だから、今でも、寒川か茅ヶ崎の毒ガス工場の跡地から問題の物質が出てくるのは当たり前ですね。

九条こそ、九条を守ってこそ、それを世界に発してこそ、本当の終戦ではないでしょうか。

戦中、戦後の庶民の生活についてももう一度、よく観、よく考えてみたいものですね。



—吹越政子—



発行 ふじさわ・九条の会 (ニュース担当編集)

連絡先 藤沢市亀井野 1371-5 小林 0466-44-0375

折原 0466-26-3321 永田 0466-34-1986

河西 0466-25-4954 発行日2007-8-31